

## わが街熊谷遺跡めぐり

# 立野遺跡

### 1 はじめに

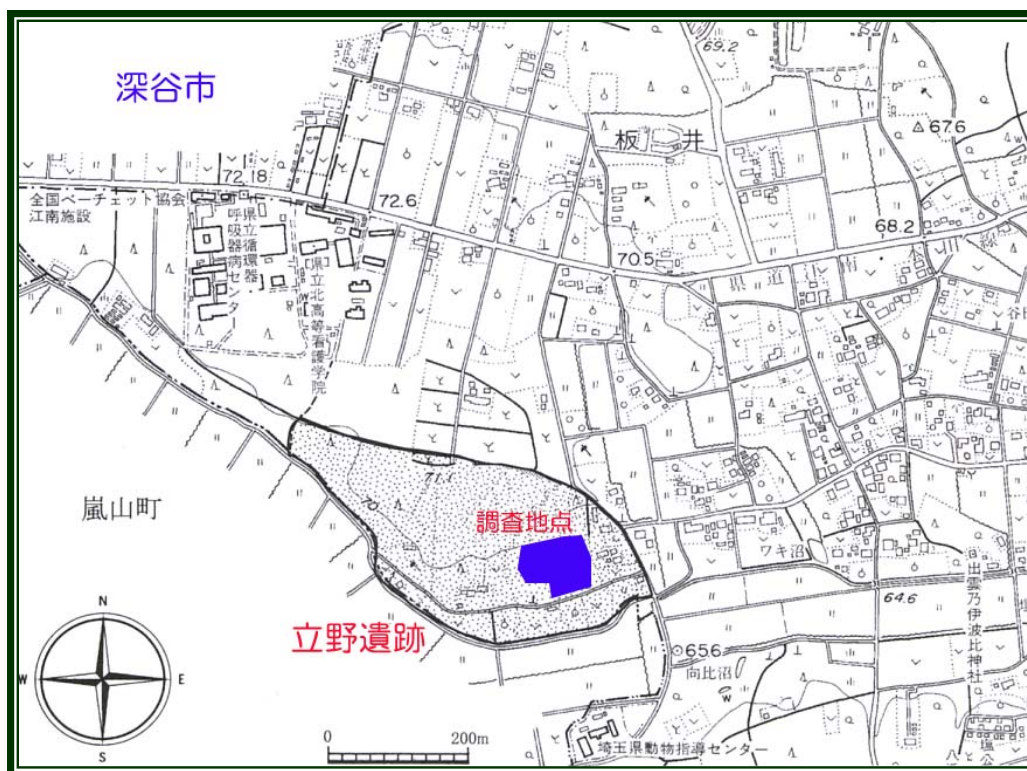
立野遺跡は、熊谷市南西部板井地内の江南台地上に所在する、縄文時代から中世にかけての遺跡です。

南側には和田川が流れ、川を挟んだ対岸には、嵐山町古里古墳群が位置し、さらに南側には比企丘陵北縁に位置する埼玉県指定史跡塩古墳群が望めます。

本遺跡の北側には、古墳時代から平安時代の集落跡である桜山遺跡が地形的に連続し、和田川に沿って東側には、古墳時代から平安時代にかけての集落遺跡である氷川遺跡、岩比田遺跡が続いています。

第1次調査は、2002年に行われ、古墳時代終末期の古墳10基と、小石室1基、縄文時代中期の集石1基が確認されています。第12号墳からは、埼玉県内で初となる金銅製毛彫杏葉が2点出土しています。

第1図 立野遺跡位置図



## 2 立野遺跡の調査

今回の調査は第2次調査となり、2005年に総合公園造成にかかる発掘調査として実施しました。

主な遺構としては、古墳時代の住居跡・古墳、平安時代の住居跡・掘立柱建物跡、中世の墓壇・地下式坑・井戸・溝等が確認されています。

出土遺物は、古墳時代の住居跡より石製勾玉・土師器、古墳より鉄鏃が出土しています。

平安時代の住居跡からは、「林内」「大家」「寺」と墨書された土器が出土しており、本遺跡から約1km北東に、同時期に存在したことが発掘調査で確認されている寺内古代寺院跡との関連が注目されます。

中世の墓壇・地下式坑・井戸からは、五輪塔、板碑、茶磨、石臼、銭貨、陶器等が出土しています。平安時代後期には、板井桜山の地に長命寺が開かれたとされ、中世には修験寺院として男衾・比企郡域の同宗寺院を統括した有力寺院となり、桜山の地には長命寺の開山堂があったとされることから、今回確認された遺構との関連が推測されます。

## 3 地下式坑について

地下式坑は、地表面から垂直に竪穴を掘って出入り口とし、その底からさらに横穴を掘って空間（主体部）を造った施設です（第2図）。

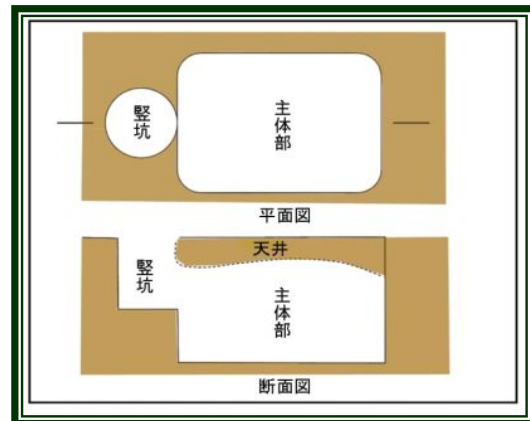
地下式坑は、中世のお墓という説や、食料などを保存する貯蔵庫として使われたのではないかと、色々な説があり、その形状から使用目的を判断することが非常に難しい遺構です。

立野遺跡で見つかった地下式坑は、主体部から一括廃棄された状態で五輪塔等が出土しており（写真1）、お墓として使用された可能性が考えられます。

写真1：第1号地下式坑遺物出土状況



第2図 地下式坑平面断面模式図



## 4 五輪塔について

第1号地下式坑からは、五輪塔が3セット＋空風輪・水輪・地輪の部材（火輪欠）が出土しています（写真2）。

五輪塔は、供養塔と考えられており、一般的に造立されるようになったのは鎌倉時代以降で、内部に遺骨等を納めたものが現存し、今でも供養塔や墓碑として造塔され続けています。

上から、空輪（宝珠形）、風輪（半月形）、火輪（三角形）、水輪（円形）、地輪（方形）と呼ばれる五つの部位で構成され（第3図）、古代インドにおいて宇宙の構成要素（元素）と考えられた、五大（空・風・火・水・地）を表徴しています。それぞれの部位に「空（キャ）、風（カ）、水（バ）、地（ア）」の梵字（種子）や漢字を刻む例が多くあります。

写真2：第1号地下式坑出土五輪塔



第3図 五輪塔各部名称



## 5 茶磨（茶臼）について

15世紀から16世紀に作られたと推定される地下式坑から、茶磨の下石1点、上石1点が出土しています。

茶磨は、中国の北宋時代（960～1127）に発明され、中世日本に伝わった、茶葉を粉末にする石製の回転式粉碎機のことです。「抹茶」を製造するためには必要不可欠のものでした。

臨済宗の祖栄西（1127～1279）が、中国より茶を持ち帰ったとされていますが、茶磨の伝来は、少し遅れて14世紀初頭ごろと推定されています。粉末にした茶を器に入れ攪拌して飲む点茶法は、当初寺院を中心に広まっていっ

たことから、中世において、本遺跡付近に寺院が存在したことも推測されます。

第1号地下式坑より出土した五輪塔は、3セット分は部材が全てそろっていますが、1セット分だけ火輪が存在しませんでした。各部材は、角が磨耗しておらず、造立されてまもなく廃棄されたと考えられることから、1部材のみ見当たらないのは不自然な気がします。

そこで、茶磨の下石を逆さまにして、火輪の代わりに載せたところ、上に空風輪が下石の下面のくぼみにうまく収まり、造立することができました（写真3）。

一休宗純（1394～1481）の『骸骨』に「なきあとの かたみに石が なるならば 五りんのだいに ちゃうすきれかし」という句があります。茶磨をつくることのできるような身分でありながら、修行を怠っている高僧達への風刺をこめて詠んだ句とされています。

また、熊谷市西別府安楽寺境内には、灯籠の火袋に見立てて茶磨の上石を再利用したものが現存しています。

お茶を広めた個人を偲び、供養塔の一部に使用していた茶磨を転用したのかもしれない。

第4図 茶磨の各部位名称

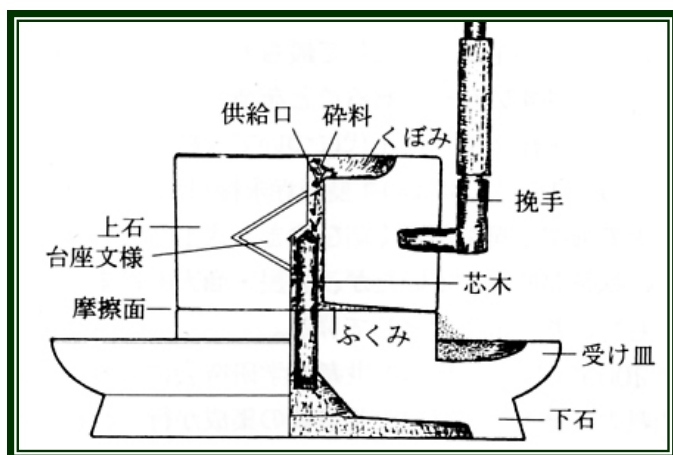


写真3：五輪塔+茶磨



平成23年4月25日発行

熊谷市立江南文化財センター（熊谷市教育委員会 社会教育課 文化財保護係）

— わが街熊谷遺跡めぐり — 立野遺跡 テーマ展解説書 第8集